



TITLE:

『女の一生』の宴会場面に見るモーパッサンの描写技法：『ボヴァリー夫人』との比較において

AUTHOR(S):

北川, 美香

CITATION:

北川, 美香. 『女の一生』の宴会場面に見るモーパッサンの描写技法：『ボヴァリー夫人』との比較において. 仏文研究 2000, 31: 65-74

ISSUE DATE:

2000-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137907>

RIGHT:

『女の一生』の宴会場面に見るモーパッサンの描写技法

——『ボヴァリー夫人』との比較において

北 川 美 香

フランスのリアリズム小説は現実に密着した要素の一つとして食事場면을重視すると言われる。とりわけ婚礼の会食は、特別料理を供するハレの場・人生の通過儀礼・2人の人間を中心とする親族の新しいネットワークの構築など社会的に多様な役目を担っているため、小説の山場あるいは転換点として機能することもある。それはまた、作家の個性が如実に現れる点で我々の関心をそそる。実際、バルザックは「婚礼の夜のパーティーは何もかもが含まれている人生の縮図」と、『従姉ベット』のなかで述べている。といってもバルザックの場合、食欲そのものには低い次元の価値しか与えていなかったと読める。主に上流階層に属する登場人物達は、会食中でも知的な会話で才気を競い合うのに忙しい。食欲を満たす即物的な快感を作品にたどるには、やはりゾラを待たねばならないようだ。『居酒屋』におけるヒロインの結婚披露宴と誕生日パーティーの挿話は、まさに食への情熱を中心テーマに据え、食べることの感覚的・身体的側面を直視している。フロベールやゾラに比べれば、モーパッサンが描く「食」に関しては今まであまり研究が進んでいなかった。しかしながら、彼の作品には食事場面が少なからず見受けられ、小説構成上重要な鍵を握ると考えられる。

たとえば、長編処女小説『女の一生』(1883)を見てみれば、宴会場面が2回出てくる。結婚式を予感させ、そのリハーサルとも解釈されるボートの命名式の後と、主人公ジャンヌの結婚式後である。モーパッサンがこの小説を準備するにあたって何年もの月日を費やし、いくつもの草稿を残したことはつとに知られている¹⁾。なかでも、1878年3-6月に執筆された最初の草稿——冒頭4章分にあたり、114枚に及ぶ——は興味深く思われる。なぜなら、作家自身に«Vieux manuscrit»と題されたこの草稿は、修正をほとんど施されないまま執筆に行き詰まって数年放置されており、着想段階でのモーパッサンの小説構想が窺えるからである。この草稿を決定稿とつき合わせると、命名式後の宴会描写は1/10以下の量に減少しているのが分かる。モーパッサンが相当量の原稿を削減するのは非常に珍しい。大幅に書き直した理由は様々に推し量られてきたが、次に来る結婚式シーンとの重複を避けたため²⁾、あるいは師と仰いだフロベールが同時代の女性を扱った『ボヴァリー夫人』の結婚披露宴シーンと重複するのを嫌ったから³⁾というのが定説になっている。果たしてこの推量は妥当なのだろうか。不都合を回避しようとする消極的理由しか見あたらず、作家自ら進んで働きかける要因はなかったと断言できるのだろうか。モーパッ

サンの描写はバルザックのような徹底的なものでなく、読者の想像力に訴えたい部分に限られる。従って、推敲後残された描写箇所は、物語構成上必要と判断されたからこそ削除を免れたはずだ。残された宴会描写を検討することで、草稿を大きく変更してまで読者に伝えようとした作家の意図を探るのが本論の目的である。

I 草稿と決定稿における命名式後の宴会描写

まず、命名式の草稿と決定稿とを比較してみれば、圧倒的に量が違う。それも単に水増しされていたというより、決定稿にはない要素が草稿に多く含まれていた。たとえば、草稿では登場人物が煩雑なほど多く、固有名詞を与えられた人物がジャンヌとその未来の夫以外に7名も数えられる⁴⁾。しかし、決定稿ではこれがゼロになる。登場人物が減り、周辺的人物が繰り広げるエピソードが削られたため、ジャンヌの動勢に読者の注意が絞られるという結果を招いている。また、ジャンヌの弟でトラブルメーカーのアンリ、薄幸の盲人、殺されかけた犬といった今後のヒロインの不幸を暗示し、作品に暗い影を落とす要素が決定稿ではすべて抹消されている。盲人が削除されたのは『ボヴァリー夫人』を連想させるからというフォレストイエやビュリーの説もある⁵⁾が、それでは他の人物が削除された事実を説明しきれない。やはりここでは、不吉な要素を取り払うことによって、ジャンヌの持つ幸福感を小説の冒頭部——修道院を出て両親の元へ帰る場面——から結婚式まで持続させるのが作家の狙いではないだろうか。食事内容について言えば、本論末尾に掲げた表の左の列に見られるように草稿では具体的な料理名〈スープ、魚料理、七面鳥〉や飲み物の名前〈シードル、ワイン、オー・ド・ヴィ〉が挙げられているが、決定稿では食事の中身についての記述がわずか1行に集約されてしまう。

Un bon déjeuner les[les convives] attendait aux Peuples.

La grande table était mise dans la cour sous les pommiers. Soixante personnes y prirent place; marins et paysans. (*Une vie*, p.34)

それだけでなく、登場人物の食事への執着ぶりや満腹するにつれて高まってゆく騒々しさも描かれなくなる。

食卓描写の差異は他にも認められる。草稿では、客の招かれた部屋・農夫や漁師の集う庭・それを柵の外から眺める子供達と人物群が3つの場所に分け隔てられている。ところが、決定稿では先程の引用第2段落に見られるように、農夫や漁師も貴族らと同じ食卓についており、家の内外の差異や招待客の階層差が希薄になっている。

もう一つの大きな違いは、宴会の席でのジャンヌが示す心の動きと態度である。草稿でのジャンヌの様子をここに挙げてみよう。

Elle[Jeanne] avait peine à ne pas chanter aussi, tant elle était devenue joyeuse; et un besoin de marcher, de danser, de courir lui remuait les jambes; elle se sentait légère à toucher le plafond d'un bond, à passer comme une balle par la fenêtre, à monter d'un élan la grande côte en face et à la redescendre en quelques sauts.

Et brusquement elle se dit : “Je l[Roger=Julien]’aime, je l’aime, c’est sûr que je l’aime.” Et elle baisa si passionnément l’aveugle que tout le monde la regarda. Alors elle rougit et redevint calme. (*ibid.*, p.1323)

この引用の直前で未来の夫ジュリアン（草稿ではロジェ）が宴会を早く退席するのではと心配したジャンヌは、それが杞憂と分かった上記第1段落で駆け回り跳び上がりたい欲求に駆られる。このように、ヒロインは感情の起伏に富んでいる。それに加えて、かいがいしく盲人の世話をしたり、上記引用の最後から2行目にあるように「あまりにも情熱的に盲人にキスしたので皆が彼女を見」たり、外界へ働きかける積極的な行動力を持ち合わせている。

一方、決定稿では次の引用で確認できるようにただ幸せに酔っているばかりの内省的な女性に変貌している。

Jeanne, à côté du parrain[Julien], voyageait dans le bonheur. Elle ne voyait plus rien, ne savait plus rien, et se taisait, la tête brouillée de joie. (*ibid.*, p.34)

つまり、ヒロインの夢想性が高められ、現実と乖離した幸福感が創出されたと言える。全体として見れば、決定稿の祝宴シーンは単に量が減ったのではなく、世間知らずのジャンヌが抱く理想が存続するようになった状況に対応して、不穏な要素が削られ、具体的食事内容や満腹感の引き起こす騒ぎが喚起する生々しさや猥雑さがなくなっている。その結果、現実と切り離された理想郷のイメージが小説のこの段階でも維持されている。以上のような変更が行われたのはなぜか。

始めに触れたようにパファロやフォレストイエは、『女の一生』では結婚式披露宴を強く印象づけるためにノルマンディー風の宴会が命名式から持ち越されたと推論している。もし、本当に結婚式披露宴との描写の重複を恐れたのなら、草稿における命名式から決定稿の披露宴にすべての要素が引き継がれているはずである。果たしてそうなのだろうか。再度、末尾に掲げた表に目を通せば、草稿では料理のメニューが詳細に説明され、食欲をそそるすばらしさが繰り返し描かれていることが見て取れる。さらに、3つの場所に別れていながら、客のそれぞれのグループが取る態度は完全にパラレルになっている。1段目第2項目にあるスープが給仕されるのを待つまじさ、2段目のスープを飲むことへの執着（皿とスプーンがたてる音及びスープを飲む音しか聞こえない）、6段目のオー・ド・ヴィを口にするあたりからの座の乱れ、7段目の七面鳥料理が与える極度の興奮など。食欲の普遍性が異なる階層間を取り持つ原動力として働き、どの集団も食事の進行と共に盛り上がっているのが窺える。

他方、決定稿の披露宴シーンでは、確かに階層差は引き継がれているが、不必要に細分化され

ていた3等分から2等分になっている。その結果として、中流階級と民衆との間の対立がより鮮明になっている。

Le dîner fut simple et assez court, contrairement aux usages normands. **Une sorte de gêne paralysait les convives**. Seuls les deux prêtres, le maire et les quatre fermiers invités montrèrent un peu de cette grosse gaieté qui doit accompagner les noces.

Le rire semblait mort, un mot du maire le ranima. Il était neuf heures environ; on allait prendre le café. **Au dehors, sous les pommiers de la première cour, le bal champêtre commençait**. Par la fenêtre ouverte on apercevait toute la fête. **Des lumignons** pendus aux branches donnaient aux feuilles des nuances de vert-de-gris. **Rustres et rustaude sautaient en rond en hurlant un air de danse sauvage qu'accompagnaient faiblement deux violons et une clarinette** juchés sur une grande table de cuisine en estrade. **Le chant tumultueux des paysans couvrait entièrement parfois la chanson des instruments**; et la frêle musique déchirée par les voix **déchaînées** semblait tomber du ciel en lambeaux, **en petits fragments** de quelques notes **éparpillées**.

Deux grandes barriques entourées de **torches flambantes** versaient à boire à la foule. Deux servantes étaient occupées à rincer incessamment les verres et les bols dans un baquet, pour les tendre, encore ruisselants d'eau, sous les robinets d'où coulait le filet rouge du vin ou le filet d'or du cidre pur. Et les danseurs assoiffés, les vieux tranquilles, les filles en sueur se pressaient, tendaient les bras pour saisir à leur tour un vase quelconque et se verser à grands flots dans la gorge, en renversant la tête, le liquide qu'ils préféraient.

Sur une table on trouvait du pain, du beurre, du fromage et des saucisses. Chacun avalait une bouchée de temps en temps, et, **sous le plafond de feuilles illuminées**, cette fête saine et violente donnait aux **convives mornes** de la salle **l'envie de danser aussi, de boire au ventre de ces grosses futailles en mangeant une tranche de pain avec du beurre et un oignon cru**. (*ibid.*, p.43)

ここに使われる語彙や表現を比較すると、内外の対立関係は明らかである。最初に室内の招待客に注目すれば、1行目に見られるように「夕食は簡素で短」く、その後皆すぐ帰宅してしまう。そのうえ、1-2行目にたどれるように「ある種の気詰まりが招待客を金縛りにし」、4行目にあるように「笑いは途絶え」、最後まで妙に静まり返っている。それに対し、5行目以降に「外では表の庭のリンゴの木の下で田舎風の踊りが始まっていた」と語られているように庭で庶民が繰り広げる宴会はエネルギーで、大いに盛り上がる。戸外には光と音があふれている。第2段落3-4行目の「ランプ」、第3段落1行目の「燃え上がるたいまつ」、最終段落2-3行目の「明

るく照らされた木の葉の天井の下」といった表現があり、第2段落5行目のように「野趣のある踊りの曲が大声で歌われて」いる。さらに言えば、同じ文章で「田舎者達は、輪になってはねている」とあるように上方が指向されて、躍動感・生命力に満ちている。しずんで生気のない室内とはまったく対照的である。第2段落後半で田舎者達の声は、文化や優雅さを表すバイオリンの音を断ち切ってしまう。第2段落最後4行を見れば、田舎者の声が騒々しく«tumultueux», 巻き起こって«déchainées» いるのに対し、か細い«frêle» 楽器の音は完全に«entièrement» かき消されることもあり、引き裂かれ«déchirée», ぼろぼろに«éparpillées» 小さな破片になって«en petits fragments» 空から落ちてくる«tomber du ciel» ようである。猥雑さのために上品さが完全に破壊されてしまう過程が象徴されている。

そのうえ、中流階層向けの豪華な食事の描写はなく、第3段落にあるように庭の人たちに用意された大量のアルコールと最終段落1行目のほとんど手の加わっていないシンプルな食事（パン・バター・チーズ・ソーセージ）だけが具体的に述べられ、その3行目以降にあるように「陰気な招待客も踊ったり、バターをつけたパンと生のタマネギを食べながら樽の横腹から飲んだりしたい」と羨望の眼差しを送る。階層間の断絶は草稿とは比べものにならない。まさに、地方貴族の生活力や将来性のなさを圧倒する民衆の生命力が端的に表されている。付け加えるならば、『ボヴァリー夫人』に関しても指摘される⁶⁾が、モーパッサンも食事と性の問題を明らかに意識して結び付けていることを考慮すると、上流層の意気消沈ぶりはジャンヌの性的未成熟、その引き起こす初夜の絶望、そしてより食欲に勝るつまり性的魅力に富んだ女中ロザリーへの夫の執着という今後の展開を暗示しているとも言えるのではないか。

このように、命名式草稿には見られなかった階層差、ヒロインの所属する階層の沈滞ぶりが描かれるようになった変化にはどんな意味があるのだろうか。実はここに『ボヴァリー夫人』の披露宴シーンとの大きな差異があると思われる。冒頭で述べたようにフォレストイエらは、『ボヴァリー夫人』との重複を避けたために命名式草稿は大幅に削減されたと主張する。しかしながら、本当に『ボヴァリー夫人』への連想を絶ちたかったのなら、宴会シーンそのものをすべて削除することもできたはずである。なぜそうしなかったのだろうか。『女の一生』と『ボヴァリー夫人』で披露宴シーンを比較すればモーパッサンが宴会描写に託した意図がより明確になるのではないだろうか。

Ⅱ 『女の一生』と『ボヴァリー夫人』における宴会描写の相同

『ボヴァリー夫人』では、結婚式の準備段階で「料理は何皿にするか、アントレは何がよいかなどと料理の質と量が思案されている。

Dans les visites que Charles faisait à la ferme, on causait des préparatifs de la noce, on se demandait dans quel appartement se donnerait le dîner; on rêvait à la quantité de plats

qu'il faudrait et quelles seraient les entrées.

Emma eût, au contraire, désiré se marier à minuit, aux flambeaux; mais **le père Rouault ne comprit rien à cette idée**. Il y eut donc une noce, où vinrent quarante-trois personnes, où l'on resta seize heures à table, qui recommença le lendemain et quelque peu les jours suivants. (*Bovary*, p.51)

その成果として、実際の宴会シーンでも料理内容が延々と描写される。

C'était sous le hangar de la charretterie que la table était dressée. Il y avait dessus quatre aloyaux, six fricassées de poulets, du veau à la casserole, trois gigots et, au milieu, un joli cochon de lait rôti, flanqué de quatre andouilles à l'oseille. Aux angles se dressait l'eau-de-vie dans des carafes. Le cidre doux en bouteilles poussait sa mousse épaisse autour des bouchons, et tous les verres, d'avance, avaient été remplis de vin jusqu'au bord. De grands plats de crème jaune, qui flottaient d'eux-mêmes au moindre choc de la table, présentaient, dessinés sur leur surface unie, les chiffres des nouveaux époux en arabesques de nonpareille. (*ibid.*, pp.54-55)

このような羅列は招待客の乗ってきた馬車や身につけた衣装のカatalog的列挙と相まって、田舎のプチブルの虚栄心に由来すると考えられる。準備段階の引用最後にある43人の客、16時間の食卓と数字がたたみかけられるのも数量をあげるブルジョワ精神を表すのだろう。

また、『ボヴァリー夫人』にもバイオリンが現れるが、こちらは婚礼の行列の先頭に立ち、その音が絶えず聞こえている。つまり、バイオリンは他の人々を先導しているため、登場人物達が文化的なものへ敬意を払っていると感じられる。

Le ménétrier allait en tête, avec son violon empanaché de rubans à la coquille; les mariés venaient ensuite, les parents, les amis tout au hasard, [...] on entendait toujours le crin-crin du ménétrier qui continuait à jouer dans la campagne. [...] Le bruit de l'instrument faisait partir de loin les petits oiseaux. (*ibid.*, p.54)

さらに、最後に「楽器の音が遠くから小鳥の群を飛び立たせた」点から、人だけでなく自然よりも優位に立っているのは明確である。まさに自然に対するブルジョワ的勝利を意味するのではないだろうか。そして、『ボヴァリー夫人』の宴会に伴う悪ふざけは家の外でなく部屋の内部で行われる。内外の区別は認められない。部屋の中にいる人々自体が卑猥な騒ぎを起こし、一晩中飲んでいるのだから。エマの結婚披露宴に招かれた客の社会階層は均一で、『女の一生』の披露宴シーンと決定的に異なる。

以上の差は、2人のヒロインひいては2作品の作品構成の違いを映し出している。エマは比較

的裕福とはいえ、農民の娘に過ぎず、自分の手を使って農場を切り盛りしている。その手は美しいとは言えなかった。

Sa main pourtant n'était pas belle, point assez pâle, peut-être, et un peu sèche aux phalanges; elle était trop longue aussi, et sans molles inflexions de lignes sur les contours. (*ibid.*, p.38)

エマの醜い手という身体的特徴は、フロベールが準備していたセナリオのごく初期の段階からの設定で、作家のこだわりが見て取れる。

一方のジャンヌは風貌からして生まれつきの貴族である。

[...] une chair d'aristocrate à peine nuancée de rose, [...] (*Une vie*, p.4)

エマは貴族のパーティーに招かれた際、戸外から宴会の様子を窺っている農民に自分自身の姿を認めている。

[...] Mme Bovary tourna la tête et aperçut dans le jardin, contre les carreaux, des faces de paysans qui regardaient. Alors le souvenir des Bertaux lui arriva. Elle revit la ferme, la mare bourbeuse, son père en blouse sous les pommiers, et elle se revit elle-même, comme autrefois, écrémant avec son doigt les terrines de lait dans la laiterie. (*Bovary*, p.85)

結婚相手のシャルルも財産を持たない田舎医者で、開業するために年収1200フラン(現在の日本円に換算して約120万円)の未亡人と最初の婚姻を結んでいる。そのうえ、浪費するようになってエマが本質的には吝嗇の実務家である点は作品中に何カ所も確認できる。一例を挙げれば、現金を用意するために古手袋や古帽子を売り払う次の引用に、売値をふっかけて一步も引かないエマの姿を見いだせる。

[...] elle marchandait avec rapacité, — son sang de paysanne la poussant au gain. (*ibid.*, p.367)

それにひきかえ、没落した田舎貴族と言ってもジャンヌは毎年2～3万フラン(2～3千万円)の収入があがる土地を持つ貴族の娘で、新婚旅行の饞別に両親から2千フラン(200万円)も与えられている。彼女は「金銭など問題にしない」不労階層に生まれ育ち、経済観念がまるでない。

[...] élevée dans une famille où l'argent comptait pour rien. (*Une vie*, p.77)

エマが出身背景と洗練された理想の間に横たわる埋めがたいギャップに起因する例外的悲劇に苦しんだのであれば、ジャンヌは女中ロザリーに代表される民衆の台頭と裏腹に没落していく貴族が経験した悲劇の典型例と呼べるのではないか。先程引用した『ボヴァリー夫人』の披露宴準備の第2段落を見れば、エマは父に望みをまったく理解してもらえない。結婚式とその準備の段階でエマは、典型的農夫の父に限らず、デリカシーのない夫、猥雑な騒ぎを起こす周囲の人々と対立し、浮き上がった存在となっている。小説全体を通じて友人が1人もできないことからエマの孤立した位置づけを確認できる。ジャンヌは貴族の見得を捨てた現実主義者の夫と対立するものの、旧態依然とした父母やおばとは一体化したままである。エマが所属する社会への不適応を起こしたとすれば、ジャンヌは生まれ落ちた境遇に終始忠実であったと言える。このようなヒロインとその所属階層との関係、及びその階層の辿る運命が、披露宴描写の違いに投影されている。『ボヴァリー夫人』では均一のブルジョワ社会を揶揄するような調子で描き、そこから遊離するエマの苦悩を浮き上がらせばよいのだが、『女の一生』では階層差と貴族層の相対的弱体化をジャンヌの人生の背景として描く必要性があった。

以上のように、モーパッサンが宴会場面を大幅に書き直したのは、『ボヴァリー夫人』と重複することを回避したというような消極的姿勢によるばかりでなく、それとは異なる自分なりの物語展開を補強するための積極的な小説技法の開拓ゆえであったと結論づけられる。ジャンヌの夢想的性格の強化、結婚生活破綻の前兆の提示、貴族階級没落の象徴といった物語の展開上欠かせないプロットの先取りという必然的な変更と考えられる。修道院を出て以来ずっと夢の世界で生きてきたジャンヌが厳しい現実と直面するターニングポイントとして結婚という人生の通過儀礼を設定する点で、命名式と結婚式の宴会描写が効果的に機能している。言い換えれば、モーパッサンは小説冒頭部からジャンヌの結婚前までは極力現実の醜さを表面に出さないように抑え、ジャンヌの夢に彩られた理想郷のイメージを維持し、結婚式では彼女が代表する没落地方貴族の生活力のなさを民衆の現実根ざしたパワーと対比させることで、その衰微してゆく末路ひいてはジャンヌ自身の不幸な将来を暗示したのではないだろうか。宴会描写は社会文化的な読みを要請する点で欠かせない要素になっている。

表 『女の一生』草稿に描かれたボート命名式後の宴会場面

1878年3-6月執筆 “Vieux manuscrit” より抜粋
(Guy de Maupassant, *Romans*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, pp.1318-1323)

ページ, 行	料理の進行状況	室内	庭	柵の外側
p.1319, l.1-l.21	<ul style="list-style-type: none"> • fumait par quatre soupnières géantes • les carafes de cidre et les bouteilles de vin mettaient une double gaîté dans les yeux des invités 	<ul style="list-style-type: none"> • les maîtres, les autorités • on attendait la marraine 	<ul style="list-style-type: none"> • les matelots, Henry • Ils se tenaient en cercle à quelque distance de la table 	
p.1319, l.18- p.1320, l.18		<ul style="list-style-type: none"> • les têtes bientôt furent inclinées vers les assiettes • une musique de soupe avalée 	<ul style="list-style-type: none"> • les assiettes de soupe circulèrent et on n'entendit plus que des cliquetis de vaisselle mêlés à l'aspiration des bouches humant le bouillon dans les cuillers 	
p.1319, l.28-1.30		<ul style="list-style-type: none"> • le silence dans la salle était complet 	<ul style="list-style-type: none"> • s'élevait un faible murmure de voix 	
p.1320, l.50-1.55	<ul style="list-style-type: none"> • un superbe turbot, couché sur un lit de persil 	<ul style="list-style-type: none"> • tous les yeux demeuraient fixés sur le poisson • le silence recommença 	<ul style="list-style-type: none"> • aucun bruit non plus ne venait du jardin 	
p.1321, l.1		<ul style="list-style-type: none"> • tout le monde mangeait, ne pensant pas à autre chose 		
p.1321, l.38-52	<ul style="list-style-type: none"> • l'eau de vie 	<ul style="list-style-type: none"> • l'on trinqua • les verres étaient déjà vides 	<ul style="list-style-type: none"> • une rumeur grandissait 	<ul style="list-style-type: none"> • une odeur de mangeaille grisait une cinquantaine de galopins qui regardaient de la route
p.1321, l.54- p.1322, l.9	<ul style="list-style-type: none"> • dix dindons énormes, reluisants, rissolés, dont une fumée odorante s'élevait 	<ul style="list-style-type: none"> • on s'était levé pour admirer la majesté du défilé 	<ul style="list-style-type: none"> • une effervescence tumultueuse emportait l'assemblée, doublant la sonorité des voix, aiguissant les rires, affolant les têtes 	<ul style="list-style-type: none"> • les gamins émerveillés se hissaient à la grille
p.1322, l.23-1.51		<ul style="list-style-type: none"> • les propos devinrent facétieux • un frisson de rire étouffé courut 	<ul style="list-style-type: none"> • le tumulte devenait effrayant • cette tempête de cris 	

註

- 0) 本稿は1999年度日本フランス語フランス文学会関西支部大会（11月27日、関西学院大学）での口頭発表の内容に加筆修正を施したものである。本論中の『女の一生』からの引用は Guy de Maupassant, *Romans*, Louis Forestier éd., Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1987, 『ボヴァリー夫人』からの引用は Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, Gallimard, 1972 による。強調はすべて筆者による。
- 1) 『女の一生』の草稿研究では、André Vial による *La Genèse d'une vie* (Les Belles-Lettres, 1954) が名高い。本稿でも、『女の一生』の草稿に関する記述はこの論文に拠っている。
- 2) George Bafaro, "La genèse d'une vie" in *Analyses et réflexions sur une vie de Guy de Maupassant*, Marketing, 1979, p.153. 及び Forestier の註 (*op.cit.*, p.1234) 参照。
- 3) Mariane Bury, *Une vie de Guy de Maupassant*, Gallimard, 1995, pp.81-82. Bernard Valette, *Guy de Maupassant une vie*, PUF, 1993, p.24, Louis Forestier, *op.cit.*, p.1234, p.1267 参照。そのほか、ヴィアルやフォレストイエはジャンヌの父親の財政状況が草稿より決定稿の方で悪化したことを理由の一つに挙げているが⁸、パーティーの招待客の人数は逆に増えているので、これは十分説得的と言えない。
- 4) 市長、市長夫人、ジャンヌの母、ジャンヌの弟、司祭、司祭の弟、使用人。
- 5) Forestier (*op.cit.*, p.1234), Bury (*op.cit.*, p.82) 参照。
- 6) 一例を挙げれば、Ion K. Collas, *Madame Bovary a psychanalytic reading*, Droz, 1985, p.30.